翻　訳

日本イエズス会版『サルヴァトル・ムンヂ』ポルトガル語全訳注
—第一誡「御一体のデウスを敬ひ，貴み奉るべし」に関わる10の尋問—

Tradução integral portuguesa do *SALVATOR MVNDI ou CONFESSIONARIVM* (1598) editado pela Companhia de Jesus no Japão: dez perguntas a serem feitas pelo Confessor acerca do Primeiro Mandamento de Moisés

日埜　博司

訳者緒言

日本イエズス会が 1598 年に刊行した『サルヴァトル・ムンヂ』という書物を紹介してみたいと思う。これは聴罪司祭が信徒の懺悔（カトリック用語として正しくは告解）を引き出すため作成された，いわば「聴罪のための手引書」と称して差し支えない書物である。

図版に示す扉表の中央には，イエズス会紋章が配され，その上段・下段にそれぞれ *SALVATOR MVNDI*（『地上の救い主』）とあり，通常これが書名として慣用されている。しかし扉裏には *CONFESSIONARIVM // IN COLLEGIO IAPO- // NICO SOCIETATIS. // IESV. // Cum facultate Superiorum // ANNO. M.D.XCVIII*（コンヘショナリウム。イエズス会の日本コレジヨにおいて。スウペリヨルの御許しを蒙りて。1598 年）と見え，この *CONFESSIONARIVM*（『告解書』）こそがこの書物の実際の内容を示している。

ヨーロッパ文字は扉以外にはまったく用いられておらず，本文は行草体の漢字かな交じりの日本文字で印刷してある。刊行地は長崎と推定されるものの，未詳である。

告解とは，カトリック教会における七秘蹟（サカラメントス）のひとつで，悔悛の秘蹟ともいう。洗礼を受けた後の罪を聴罪司祭が糾明し，痛恨の念をもって唯一神——デウス——の代理者としてのパードレ（司祭）へそれを告白し，デウスと和解し，罪を償い善に移る決心をし，その援けにより罪の赦しが与えられる，という秘蹟である。告解とはまた，人にではなく，デウスに対して行なうべき行為であること，また，感情の誇張を極力退けることが肝要であるとの観点から，告解と懺悔とは本来別々のもの

である，というのがカトリックの主張である。「聖霊をうけよ。汝(なんぢ)ら誰(たれ)の罪を赦(ゆる)すとも其の罪ゆるされ，誰の罪を留むるとも其の罪とどめらるべし」(「ヨハネ傳福音書」20 章 22-23 節)というキリストの言葉にもとづき，使徒とその後継者である司教・司祭に罪を赦す権限が与えられた，とするカトリックの考え方に対し，プロテスタントは，罪は告白や償いで赦されるものではないとして，告解の秘蹟を否定し，個人の内面的な悔い改めを勧める。

『サルヴァトル・ムンヂ』は，第 1 章から第 3 章で，告解の秘蹟の意義とそれに与かる心得とを説き，第 4 章・第 5 章で「十のまだめんとす」(いわゆるモーセの十誡)，第 6 章には「七つのもるたる科」(7 つの重罪)のそれぞれの条に関して「こんしゑんしや(良心。Consciência)を糺すべき条々」を列挙する。第 7 章の「善作に日を送るべき為に保つべき条々」には食前・食後の「おらしよ」(祈禱。Oração)を収め，それについても一家が罪に陥らぬよう，「でうすのがらさ」(神の恩寵。Graça de Deus)を請い奉るよう勧める。巻末に，巻中の洋語解と漢字の訓とがまとめて掲げてある。

本稿では，『サルヴァトル・ムンヂ』の第 4 章・第 5 章に見える「十のまだめんとす」から「第一のまだめんと」すなわち「御一体のデウスを敬ひ，貴み奉るべし」の項目に収められた聴罪司祭(コンヘソル。Confessor)の 10 の問い掛けを紹介し，それぞれに葡萄牙語訳を添えてみることにする。「第一のまだめんと」すなわち第一誡に関してコリャードが採録した 10 の告解は，幸い，他のすべての箇所とともに，いささかも省略することなく，ポルトガル語訳注を附して掲載を終えているから(「コリャード『懺悔録』ポルトガル語全訳注——第一誡「御一体のデウスを敬ひ，貴み奉るべし」に関する 10 の告解」『流通経済大学論集』通巻第 148 号所収)，適宜それを対照していただければ，双方間にどの程度の対応関係が存在するか，を容易に確かめることができる。

前記 10 の問い掛けをポルトガル語に直すに際して踏む手順と，それにあたって気づいたことを少々書き留めておく。

①『サルヴァトル・ムンヂ』については，雄松堂書店が 1978 年に海老沢有道の解説を附し「南欧所在 吉利支丹版集録」の一冊として影印本を刊行しているので，その影印を掲げてオリジナルの様態を示す。

②その全文翻字については，松岡洸司の貴重な業績「慶長三年耶蘇会版サルバトル・ムンヂの本文と索引」(『上智大学国文論集』6，1973 年)がある。さらに大塚光信編，岩波文庫版『コリャード 懺悔録』(1986 年)には，十誡と七大罪に関わる箇所のみの翻字が「参考」として掲げてある。基本的にこのふたつの業績に拠りつつ，訳者なりの方法で全文翻字を新たに作成する。その際，原文にほとんどない句読点を配し，清音を濁音に直し，ひらかなをルビの形で漢字に開き，逆に漢字で記された箇所にはひらかなのルビを振る，等の措置を施した。

『サルヴァトル・ムンヂ』扉表

『サルヴァトル・ムンヂ』扉裏

③上述のとおり，本文の日本語は流麗な行草体で記されている。訳者にはこのような日本語を自由自在に読むことはできない。ただしこれの解読が専門家にすら容易なものでないことは，先述の翻字双方の間に微妙な異同が認められることからも判明する。しかも本質的にかなり異質な解釈を誘発するような異同というか齟齬も，ごく稀にではあるが存在する。私なりにテキストを整定することの必要性を覚えるゆえんはそこにある。

今回紹介しようとする「第一のまだめんと」には，幸い，そのようなケースは見られないようだ。より正確なテキストの整定を期し，文意の把握をめぐる本質的な誤解をなくし，ひいては大筋において本旨からの逸脱なきポルトガル語訳を得るため，永く流通情報学部の同僚であり 2007 年 3 月に定年退職を迎えられた水野惠子先生（日本語史）の変わらぬ御指導を仰ぐことができた。

④キリシタン宣教師が 16～17 世紀日本語を写すに際して用いたポルトガル語式ラテン文字による最もオーソドックスと思われる表記法を用いてテキストを再構成する。その具体的方法は，拙稿『コリャード 懺悔録』ポルトガル語全訳注――第四誡「汝の父母（ぶも）に孝行すべし」に関わる 6 つの告解」（『流通経済大学論集』通巻 149 号所収）に記述した。ただし「キ」「ケ」「ギ」「ゲ」「ヅ」の 5 つの文字に限

っては異なる規範を設け，それらに関しては，通事バテレンとして著名なジョアン・ロドリーゲスがその著『日本小文典』(日埜博司編訳，新人物往来社，1992 年。原本は 1620 年，マカオ刊)で採用した独自の方法にもとづき "ki" "ke" "ghi" "ghe" "dzu" とそれぞれ表記する。

⑤それぞれの現代語訳を附す。

⑥それぞれの葡萄牙語訳を作成するが，それに際して採る態度なり方法なりは『コリャード 懺悔録』ポルトガル語訳を作成したときのそれに準ずる。その一端は「コリャード『さんげろく』葡語訳注雑感——在外研修余滴として」(『流通経済大学社会学部論叢』通巻第 30 号所収)に記述したとおりである。

続いて，『サルヴァトル・ムンヂ』を簡単に紹介し，順次その日本文を葡萄牙語に訳してみようと考えるわけを略述する。

訳者は，イスパニア人ドミニコ会士ディエゴ・コリャードが編んだ『懺悔録』に収載された日本人信徒の日本語による告解にポルトガル語の全訳注を附し，上梓のためのウォーミングアップのつもりで，その全容を学内誌に連載し終えた。全 11 回を要した。そのための解題をもろもろの視点から記述する過程で，『懺悔録』に収載された日本人信徒の告解は必ずしもオリジナリティーを有するものではなく(姉崎正治説)，イエズス会によって編纂された告解の聴解ならびに訓誡マニュアルのようなものがコリャードの渡日以前すでに存在しており(ただしこれはまったくの仮説であって，物的証拠も史料的裏づけもない)，コリャードは自著と称する『懺悔録』を編むにあたり，そうしたイエズス会版のマニュアルを換骨奪胎したにすぎないのではないか，という疑惑を抱く向き(助野健太郎説)のあることが判明した。

しかし『コリャード 懺悔録』を紹介した両先達の抱いたこの批判的見解の当否を糺すことに，訳者はさしたる興味がない。それよりも『サルヴァトル・ムンヂ』に見える信徒への問い掛けと，『懺悔録』に見える信徒の告解なり応答なりが，どの点において呼応し，どの点において呼応しないか，それを再確認しておくことのほうがよほど建設的な試みであるように思われる。

さらに言えば，『コリャード 懺悔録』に照応する内容を含むかもしれぬ『サルヴァトル・ムンヂ』の関係箇所をポルトガル語へ訳しておくことは，それ自体，『コリャード 懺悔録』を読む興趣を高めるわざであるばかりではなく，日本におけるキリシタン布教に絡んで生じた特殊事情のかずかずをよりよく認識するための一助となりうるであろう。キリシタンに限定せぬ 16 世紀末の日本・日本人の社会・文化・精神を探るための貴重な示唆が見出せるかもしれない(ただし，ここでいう日本・日本人とは，長崎を中心とする西九州——キリシタンには「シモ」〔Ximo〕と呼ばれた——，あるいはそこから範囲を広げても畿内——同じく「カミ」〔Cami〕と呼ばれた——に至るまでの狭義の西日本と，そこに住む人々だけを含む，と考えるのが無難であろう)。

♣

今回紹介する 10 の尋問は，唯一絶対の神であるデウスの存在に疑義を挟んだり，これに一途な信頼を貫き通さなかったり，キリシタンの典礼に疑惑を覚えたり，日本古来の民間信仰というか迷信・俗信・呪いの類を信じたりこれに馴染んだりしたことがなかったか，を問い糺すものである。

『サルヴァトル・ムンヂ』は聴罪司祭のためのいわばマニュアルであるから，当然，下記に示すとおり，たとえば，俗信・迷信・呪いについても，それらを己の信仰生活から追放するよう誡めかつ命じている[1]。では，キリシタン時代におけるカトリック宣教師が，厳格なだけで，融通の効かぬ，ドグマティズム一辺倒の姿勢で，改宗者なりこれから信仰に入ろうとする人々なりに相対したかというと，どうもそうではなさそうである[2]。

---

[1] もっともこの課題は，キリシタン時代の日本教会のみならず，中世ポルトガルのカトリック教会にとっても，小さからぬ関心事であった。たとえば，『ヴィゼウ司教ドン・ディオゴ・オルティスの小教理書』と通称される中世ポルトガルのカトリック教理書（1504 年刊）は，『旧約聖書』「申命記」の一節「汝らの中間（うち）にその男子女子（むすこむすめ）をして火の中を通らしむる者あるべからず。また卜筮（うらなひ）する者，邪法を行なふ者，禁厭（まじなひ）する者，魔術を使ふ者，法印を結ぶ者，憑鬼（くちよせ）する者，巫覡（かんなぎ）の業（わざ）をなす者，死人に詢（とふ）ことをする者あるべからず」（18 章 10-11 節）をまず掲げ（“Nõ se ache em ty quem passe seu filho ou filha per fogo, ou quem pregũte os ariolos, nem quem esguarde os sonhos e agoiros, nem seja malefico ou encãtador, nem pregũte aos demonios pollos secredos nem os adevinhos, nem pregunte aos mortos polla verdade”），その後で，このくだりに現われる連中の“定義づけ”を試みるのである。すなわち “Ariolos” は「生贄にされた獣の臓物の具合を見て予言を行なう者」（‘os que adivinhã em as entradãhas dos alimarias sacrificados’），“Agoreyros” は「鳥の啼き方や飛び方によって予言を行なう者」（‘os que adivinhã per gralhido e avoar das aves’），“Maleficos” は「問いを発する者の面前へもろもろの呪文の力を借りて悪魔どもを現出せしむる者」（‘os que per cõjurações fazem pareçer os demonios a quem preguntã’），“Encãtador” は「まがいものをもっともらしく見せかけるいかさま師」（‘ho enbaytor que faz pareçer ho que nõ he’），“Adevinho” は「啓示によって〔死者の〕語ることがわかると偽る者」（‘o que finge que per revelaçã sabe o que diz’），という塩梅だ（cf. *O Cathecismo Pequeno* de D. Diogo Ortiz Bispo de Viseu, ed. Elsa Maria Branco da Silva, Obras Clássicas da Literatura Portuguesa; 115, Lisboa, Edições Colibri, 2001, p.179）。さらにまた，「夢に見たことを拠りどころに吉凶の判断をしてはならぬのは，なぜか」に対する『小教理書』の説明（cf. *ibid.*）は，中世ヨーロッパのキリスト教において「夢」が特異な位置を占めていたことを推測させる（ジャック・ルゴフ著『中世の夢』池上俊一訳，名古屋大学出版会，1992 年。同書所収「キリスト教と夢——二世紀から七世紀」参照）。

[2] この一件をテーマとして訳者は 2002 年 6 月にリスボアで口頭発表を行なったが（cf. Hino Hiroshi, “Que

ここで個人的な体験を少し挿入することを許されたい。

1999 年は，ザビエルが日本にカトリックの教えを伝えて 450 年目に当たる年であった。この年，ほぼ 12 ヵ月を費やして特別展「大ザビエル展――来日 450 周年 その生涯と南蛮文化の遺宝」(朝日新聞社/NHK/NHK プロモーション等主催)が日本各地を巡回した(訳者は創案・企画から準備・実施にいたるあらゆる段階でこの展覧会に深く関わったので，格別な思い出がある。開幕館の川崎市市民ミュージアムでは，ポルトガルを中心とする協力国から届いた出展品の開梱に立ち会うという珍しい体験に恵まれた)。

その出展品のひとつに 1549 年 1 月 26 日付，コーチン発，フランシスコ・ザビエルのポルトガル国王ジョアン 3 世宛て自筆書翰があった。みずからを東方布教に送り出してくれたこの精神的パトロンに対し，デウスの最後の審判を畏れることを勧める主旨であるが[3]，図版に示すとおり，2 葉からなる書翰の中央部が方形に鋭利な刃物で切り取られている。いつ，誰の手で，こんな目に遭ったのか判然としないが，熱狂的なザビエル信奉者の仕業であろうとは容易に想像できる。彼または彼女の一途で純粋な信仰心を疑う必要はあるまい。しかし他方，死後，カトリック世界の崇敬を遍く集め，異例というべきスピードで，列福(1619 年)・列聖(1622 年)されたザビエルその人の自筆書翰を，彼または彼女は一種魔術的な威力が宿る聖遺物と信じ，これに健康の維持とか幸運の招来とか，どちらかといえば現世利益的な効験を期待した，と見ることはできないであろうか。

上記から訳者の脳裡にただちに連想されるのは，ザビエルが日本最初の布教をいわば記念する品々を薩摩の信徒たちに遺し，彼らがそれらから大きな功徳を得たというエピソードである。

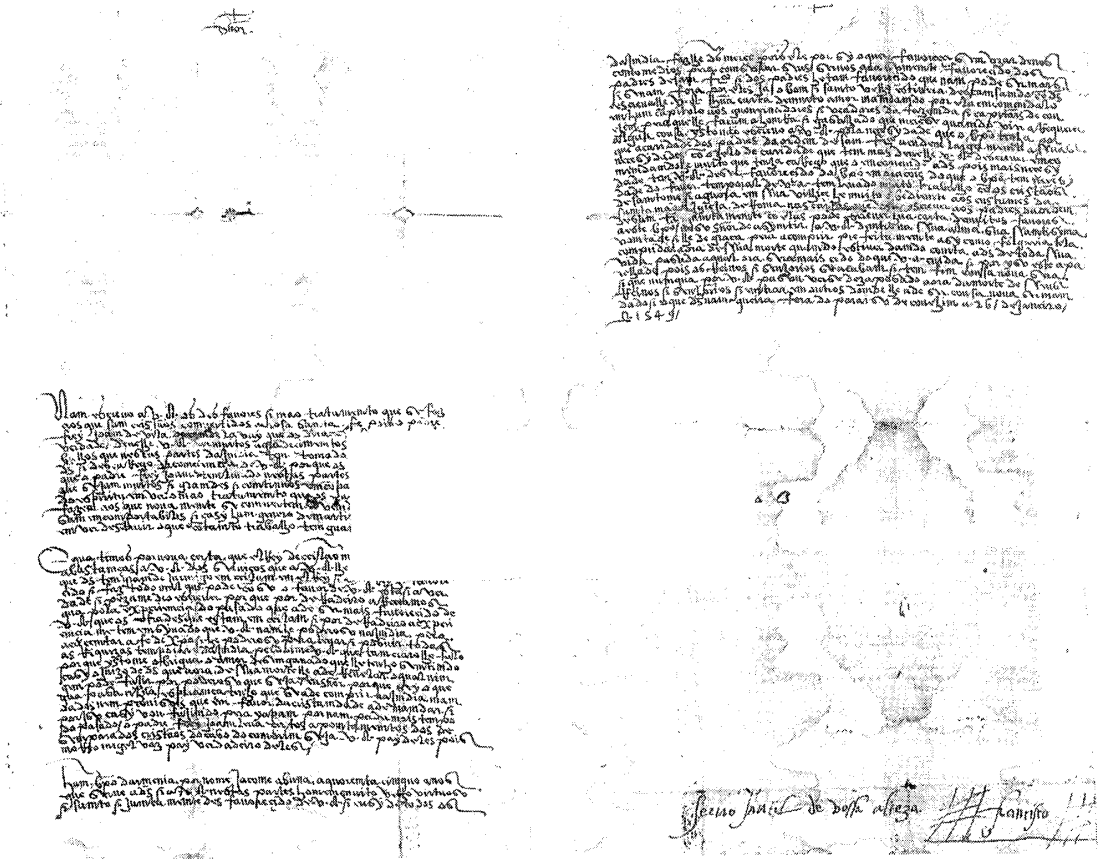
ザビエルの薩摩布教から 10 年余り後，ザビエルの伴侶であったコスメ・デ・トルレス神父の名代として，ルイス・デ・アルメイダ修道士が市来(イチク。今日はイチキと発音する)という城を訪ねた。城主の奥方は，ザビエル自筆の祈禱文およびラダイーニャ(連禱)を納めた袋をアルメイダに見せ，こう言った。「私がこれを大勢の病人たちの頸に懸けますと，それでその人たちの病気が治りました。ことに私の夫は異教徒で，もう生命がおぼつかなかったのですが，それを夫の頸に懸けましたところ，たちまち元気になりました」[4]。

---

bênçãos mundiais e seculares os fiéis e os infiéis japoneses quinhentistas procuraram no interior da fé cristã?", pp.807-835 (in *D. João III e o Império: Actas do Congresso Internacional comemorativo do seu nascimento* (Lisboa & Tomar, 4 a 8 de Junho de 2002)，それに際しては，岡田章雄「信仰習俗の意義」(『岡田章雄著作集 I キリシタン信仰と習俗』思文閣出版，1983 年，103～143 頁)という論文から大きな啓発を受けた。

[3] 『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』河野純徳訳，平凡社，1985 年，372～375 頁参照。

[4] P. Luís Fróis, S. J., *Historia de Japam*, I, ed. José Wicki, S. J., Biblioteca Nacional de Lisboa, 1976,



中央部が切り抜かれたザビエルの自筆書翰

東武美術館/朝日新聞社編『来日 450 周年 大ザビエル展 図録』(1999 年)より

続いてミゲルという熱心なキリシタンの老人がやってきて，ザビエルから贈られたという苦行用の鞭をアルメイダに見せ，こう言った。「この奥方様が重態になられました時のことですが，奥方様はいつも行なっていますように鞭打たれることを懇願なさいました。ところで奥方様が鞭打ちを願われますと，私たちの主(なるデウス)は，(メストレ・フランシスコ)師の功徳によって奥方様がただちに回復することを嘉し給うたのでした」[5]。

もうひとつ余談を挿む。

サルヴァドールはブラジルの古都である。坂の多い石畳の街並みや，“上の街”と“下の街”とがエレベーターで結ばれているところなど，一種リスボアに似た風情がある。2002 年 5 月 26 日(日曜日)に TBS 系『世界遺産』で「サルヴァドール・ダ・バイーアの歴史地区」が紹介された。そこに映し

---

pp.213-214.『フロイス 日本史 6』豊後篇 I, 松田毅一/川崎桃太訳, 中央公論社, 1978 年, 267 頁。

[5] Fróis, *Historia de Japam*, I, p.214.『フロイス 日本史 6』267 頁。

出されたボン・フィン教会(Igreja do Bom Fim)はありふれたカトリックの聖堂だ。ただし，その祭壇脇の部屋はちょっと異様な雰囲気が漂う。この通称“奇蹟の部屋”には，天井からおびただしく蜜蠟製の人型が吊るされ，ぶらぶらと揺れている。手，腕，膝，脚，足，頭，首，等々。それぞれの部位に病気を持つカトリック信者がその平癒を願い奉納したものである。

同じような趣の教会を訳者はまだポルトガルで実見したことがない。ただし隣国スペインの教会には，「肝臓だの腎臓だの，人間の臓器をかたどった木製の奉納物を見ることができ」るところがあるという。「それは，人体のその部位に病気を持っている普通の信者さんたちが，その病気の平癒を祈り，あるいはそれが平癒したことへのお礼参りのために，奉納したものであることは言うまでもありません」[6]。

このようにカトリックには，いつの頃からそうなのかは知らぬが，民衆の現世利益的願望に支えられた俗信もしくは呪いと呼んで差し支えないようなもろもろの習俗を，好意的な見方に立つなら，堅固でオーソドックスな信仰を根づかせるための方便として，信徒に対し容認もしくは黙許するという大胆さというか大らかさがあるように思われる。

日本キリシタン史において最も重要な役割を果たしたイエズス会は，日本人を信仰に導き入れるに際し，日本人が古来より継承してきた現世利益的願望をそのまま容認し，それらを実現するため彼らが従来縋ってきた崇敬なり祈願なりの対象をカトリックのもろもろの表徴へシフトするよう仕向ける，という手法に訴えた。純粋なドチリナ(教理)教育を綿密に施すのは，彼らを一旦“信仰の囲い”に取り込んでからでよい——。柔軟ともしたたかとも評しうる布教戦略である。

上記のような推断を可能ならしめる具体的エピソードのかずかずであるが，別段，公開を憚るような機密性文書に記されているわけではない。むしろそれらは，ヨーロッパ・カトリック世界で一般信徒にも広く読まれることが期待された公開性の史料——『イエズス会日本報告集』や，著名な『フロイス 日本史』など——に明記されているのである。その実例たるや実に枚挙に遑なし，と言っても過言ではない。

たとえば，キリシタンの信仰に入った武士が，戦場に臨んで用いた旗印・指物・甲冑などに，その信仰を表徴する十字のしるしを描いたり，イエズスの名を記したり，または聖書からの句を縫い取ったりしたこと。それらの功徳により，戦死・戦傷を“奇蹟”的に免れたこと。戦闘に際して，イエズス・マリアのほか軍神サンティアゴの名を唱え，その加護を乞うとともに，己の士気を鼓舞しかつ敵

---

[6] 保坂幸博『日本の自然崇拝，西洋のアニミズム——宗教と文明 非西洋的な宗教理解への誘い』新評論，2003年，260頁。

を圧伏したこと。己の武具にクルス(十字架)なりコンタツ(念珠)なりを取りつけて戦闘に臨んだゼンチョ(異教徒)の武士が，神助を得て戦功を挙げ，その効験に感じ入って洗礼を受ける決意を固めたことや，すでに入信していた武士ならば，類似の体験を経てさらに堅固な信仰を身につけたこと，等々。最後の例についてジョアン・フェルナンデス修道士は 1580 年 9 月 1 日付の書翰で京都から次のような“教化的”エピソードを書き送る(言うまでもないが，これが史実であったかどうかの“歴史的”穿鑿にはあまり意味がない)。

先頃，一大身が彼の軍隊の重立った者たちと共にキリシタンとなり，今は山の人々が洗礼を授けに来るのを待っている。まだ異教徒である一貴人は頻りにコンタツを請い，これを得るまで止めなかった。彼はそれをたいそう尊重し，これを最良の武器と見なすほどであったので槍と共に絶えず手にしていた。我らの主(なるデウス)の御許しにより，鉄砲の弾丸が飛んで来て彼の槍に激しく当たったが，彼に害を与えなかった。彼はそのことを所持していたコンタツの功徳のお蔭と考え，すぐさま，聖なる洗礼を授かる決心をし，それから数日後，受洗した。今彼は主君に改宗することを勧めて止まない。彼は鞘に納めた一種の槍を用いることから，その鞘に，長さ 5 パルモ，幅 3 パルモの非常に美しい十字架を金で刺繍させた。主君はこれを見て驚き，それは悪人を殺す jaseré〔この語彙，意味不詳〕であると言ったが，これに対して彼は，キリシタンにおいてはクルスと呼ばれ，これによって世界は救われるので，他のいかなる物よりも大事にするのであると答えた。普通，兜には各自の紋章を付けるが，彼は美しいコンタツを付けた。或る日，この貴人は教会を訪れた際，信長の最も勇敢な武将である一キリシタンに出会った。この人は彼が十字架とコンタツを携えているのを見て，このような汝を目にするのは何とも喜ばしいことであるが，汝は何を携えているのか知っていようか，予は汝に或る秘密を明かそう，予は戦さにおいて数多の評判と誉れを得，敵を殺し，予を見るとたちまち逃げ出す者の多きことを知るがよい，そしてそうなったのは，ひとえに予が，非常に薄い樹皮で造った長さ 1 ブラサ半，幅 1 パルモ強の十字架を身につけていたからである。予は戦さに臨む時，他の武器と共にこの十字架を兜の上に出るように背負うのであり，これによって予は大いに勇気を得，敵は大いに驚嘆するので一人として予の前に立ちはだかる者はない。加えて言えば，過日，銃弾が予の喉の中程に当たったが，わずかに痕跡を残しただけで害を受けなかった。主(なるデウス)はこのような恵みによって，当地の新しきキリシタン宗団を助け給うのであるから，主の奇跡

を讃えるべきであると語った。[7]

カトリックの諸表徴が示す不可思議というか“奇蹟”をめぐるエピソードは，侍の戦さの世界のみにとどまらない。「聖水」(Agoa santa)または「洗礼の水」(Agoa de santa baptismo)と称する特別に浄められた水や，聖地サン・トメ(使徒聖トマス殉教の地という伝説が残るインド亜大陸東岸の町)に産する木で製した十字架を水に浸しその水を服用させると，難産の婦人が出産したり，諸病やら悪魔憑きやらに苦しむ人々があるいは全快し，あるいは正気を取り戻したりしたこと，等々。

以上がポジティヴな観点からもろもろのカトリック的シンボルの功徳を説くエピソードだとすれば，逆にそうしたものを冒瀆するとむごい報いが待っているぞ，と脅すかの如きネガティヴな説話を記すことも，フロイスは決して忘れない。

――生月島の館の浜(タチノハマ)という海岸にキリシタンの漁夫が住んでいた。妻の出産が近づくと，小屋の壁に十字を描いた紙を貼り，一心に祈った。無事男児が生まれたが，ある日突然死を遂げてしまった。彼は取り乱し，激昂して，十字を描いた紙を切り裂き，キリシタンを棄てると宣言した。翌年，妻はふたたび妊娠し，男児を出産した。十字に執り成しを願うしおらしさはもうなかった。ところがこの子は不幸な畸形で，「下顎の骨がなく，舌が垂れ下がった(状態)で生まれた」。漁夫は“前非”を悔い，善良なキリシタンへ立ち戻ったが，顎骨も，乳を吸うための口もない男児は，しばらくして死んでしまった。「この例は，かの地のキリシタンたちが，それ以後，至聖なる十字(架)の印しに対していっそう信仰と信心を深めることに与かって力があった」[8]。

布教しようとする相手の現世利益的な欲望を刺激し，その人心収攬を図り，ひいては，カトリックが神聖と考える表徴への憧憬・崇拝・帰依の念を相手の心に植えつけようとする“布教”の手法も，キリシタン草創期のイエズス会宣教師がゼンチョ(異教徒)に対し躊躇なく用いたものだ。『イエズス会日本報告集』や『フロイス 日本史』などカトリック側の公開性史料にはそうした事例が，あからさまにというか，むしろ布教の成功を証拠立てかつ称揚するかの如き筆致をもって叙述される。

行為者の立場も，叙述の舞台も，“布教”の対象となる人々のバックグラウンドも，一切が隔絶し

---

[7] *Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de Iapão & China aos da mesma Companhia da India, & Europa, des do anno de 1549 atè o de 1580.* Primeiro Tomo (Edição fac-similada da edição de Évora, 1598), ed. José Manuel Garcia, Maia, Catoliva Editora, 1997, ff.480v-481. 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第 III 期第 5 巻，同朋舎，1992 年，280～281 頁。

[8] Fróis, *Historia de Japam*, I, pp.135-136.『フロイス 日本史 6』222～224 頁。

ているのに，邂逅した相手を“教化”したいという一念で際立った共通性を示すふたりのポルトガル人の振舞いなりメンタリティーなりが実におもしろい史料 2 点を紹介しつつ，この解題を閉じることにする。

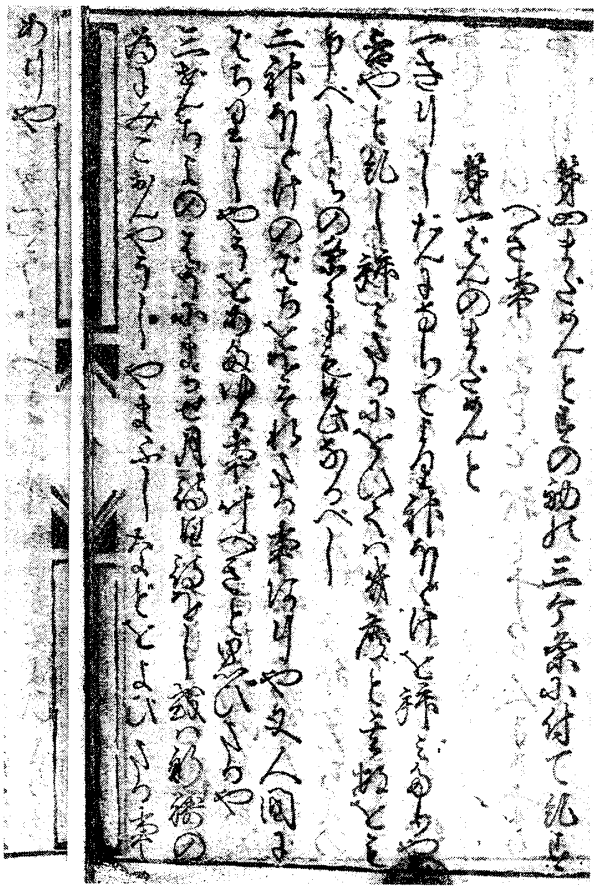
まず，ルイス・デ・アルメイダ修道士の志岐の島発信，1566 年 10 月 20 日付書翰に見える，アルメイダの五島布教のおり生じていた内乱に関する次のようなエピソードから――。

キリシタンらは船に乗る時，私のもとに来て別れを告げ，戦さで危難に陥らぬため，何らかの聖宝か，または福音書や祈禱文を記した物を与えるよう請うた。私は彼らに答えて，聖宝の代わりに十字の印やイエズス・マリアの御名を用い，いかなる苦難に見舞われてもそれらに救いを求めるべきであり，それ以外のことは必要ないと言った。彼らは皆，私の言葉を深く信じ，心慰められて私のもとを辞去し船に乗ったが，我らは我らの主なるイエズス・キリストに彼らを護り給わんことを祈った。

それから 3，4 日後，彼らは戦さから戻ってきた。主は限りなき御慈悲により，異教徒の中に多数の負傷者が出て幾人かは死んだが，ドン・ジョアン〔引用者注――五島におけるキリシタンのリーダー〕ほか，およそ 50 名のキリシタンは一人も傷を負わず，敵に対する行為により非常な名誉を携えて帰った。すなわち，25 歳の青年のキリシタンは先陣を切って進み，謀叛人の側からも非常によく武装した者が一人現れ，両者は対戦したが，シスト〔同青年はそのように称した〕は相手に与えた最初の一太刀でこれを殺し，謀叛人らが彼の所に至る前にその鎧と兜を奪い取った。これは彼らの間では最大の武功である。謀叛人らはこの予兆により大いに恐れをなしたので，(キリシタンらは)ほとんど労することなく彼らを打ち破り，生き延びた者は平戸に逃れた。異教徒は，キリシタンが一人も死傷者を出すことなく，かくも大なる名誉を担って戻ったのを見て少なからず当惑した。これにより(キリシタンらは)いかなる苦難が生じようともイエズス・マリアの御名と十字の印を切ることに非常な信心を抱くようになった。すなわち，彼らが私に告白したところによれば，彼らは下船する前に，跪いてコンタツの十字架を持ち，深い信心とともにイエズス・マリアの御名を称えて十字の印を切り，(しかる後に)上陸したとのことである。[9]

---

[9] *Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de Iapão & China aos da mesma Companhia da India, & Europa, des do anno de 1549 atè o de 1580.* Primeiro Tomo (Edição fac-similada da edição de Évora, 1598), f.222. 松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第 III 期第 3 巻，同朋舎，1998 年，141～142 頁。



『サルヴァトル・ムンヂ』「第一ばんのまだめんと」
一から三まで

次は，ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャというポルトガル人の著書『ナオ船サント・アルベルト号難船記』(1597 年)の一節(これは東南アフリカ先住民の民俗誌として，さらには，彼らとヨーロッパ人との交流を記録したロマンス語の文献として，おそらくは最古のものに属する)。インド亜大陸西岸の港市コーチンを出帆して母国へ帰航しようとするポルトガル船サント・アルベルト号が，喜望峰回航を目前にして遭難，九死に一生を得た船員と船客，それに奴隷と称するポルトガル人の従者らは上陸を果たし，東北東方向へ行軍してポルトガル人の交易地ロウレンソ・マルケス(現，マプート)をめざす。放浪の末，無事根拠地モサンビークへの便船が得られそうだという希望の生まれつつある，まさにそのとき実現した，ガマベーラと名乗る友好的なアンコセ(東南アフリカのバントゥー系先住民の部族長を表わす普通名詞)と，総司令官ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラとのドラマティックな邂逅の場面から――。

ヌーノ・ヴェーリョ・ペレイラはこれに答えて言った。わかった。御依頼の趣旨をさっそく叶えて進ぜよう。貴殿には，世界中でもっとも貴重で何よりも尊重されている宝物を進呈するとしよ

う，と。ヌーノ・ヴェーリョは首に懸けていたコンタツから十字架をはずし，そしてソンブレイロを取り，両眼を天に向け，ただならぬ敬虔さをもって十字架に接吻した。そしてそれをかたわらにいるポルトガル人へ渡した。彼らが同じ拝礼の儀を済ませると，その十字架はアンコセに手渡された。カピタン・モールはアンコセに言った。これこそは，貴殿のために遺そうとするわが友情の尊きしるしだ。今，私の部下が拝礼したのを御覧になったと思うが，どうか，それをそのまま真似られよ，と。この蛮人は十字架を手に取り，我らが示したと同じうやうやしさでもって十字架に接吻し，それを両眼のもとに持っていった。他の黒人も皆，アンコセのしぐさを真似た。

ヌーノ・ヴェーリョは黒人が至聖なる十字架にただならぬ尊崇の念を払いつつあるのを見，大工に命じ，かたわらに生えている木（この蛮人の地によくもこれほど手頃な木が生えていたもの。我らが救済のしるしはその枝からこしらえたのだ）を材料として十字架を 1 基作らせた。十字架はただちに作られた。高さは 8 パルモあった。ヌーノ・ヴェーリョはこの十字架を両手に捧げ持ち，これをガマベーラに手渡して，こう述べた。このように十字をかたどった木に磔にされることによって我らが贖い主は死を克服し給うた。この木こそ死を癒すものであり，病人にとっては健康を快復させる妙薬である。また，このしるしの功徳により，歴世の大帝は勝利を博してきたし，そして今，カトリック諸王は敵を圧伏しつつある。いともすばらしい贈り物と信ずるがゆえにこれを貴殿へ進呈したい。ついては，このしるしを家の前に供え，毎朝家を出るたびに，これに接吻して敬意を払うか，さもなくば跪いてこれを礼拝するように。御家来の衆に健康を損ねる者が出たり，耕地に降雨が足りなかったりという事態が出来しても，確信をもってこのしるしに祈りを捧げなさい。十字架で殺されることにより全人類を救い給うた神の独り子が貴殿の望むものを何であれ与えてくださるであろう，と。このような言葉とともにヌーノ・ヴェーリョは，アンコセへキリスト教界の勝利のあかしと，比類なき栄光の象徴を手交したのである。アンコセはこれを背負い，我らの一行に別れを告げた。この友情のしるしを運んでゆける喜びに彼は涙を流した。アンコセはおよそ 500 人になろうかという部下に伴われ，この十字架とともに部落へ戻った。ヌーノ・ヴェーリョが自分に言いつけかつ懇願したことを実行に移すために。[10]

---

[10] Ioão Baptista Lavanha, *Naufragio da Nao S. Alberto, e Itinerario da Gente, Que Delle Salvou*, Lisboa, Alexandre de Siqueira, 1597, ff.124-126. この記録の全文和訳は『流通経済大学論集』通巻 156～158 号（2007 年）に連載される。日埜博司「ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャ『ナオ船サント・アルベルト号遭難記』（1597 年）――ヴィラ・ヴィソーザ，ブラガンサ家所蔵初版本からの全和訳およびテキスト校訂」参照。

○第四 まだめんとすの初の三ヶ条に付て糺すべき事

第一ばんのまだめんと（Acerca do primeiro mandamento）

PRIMEIRA PERGUNTA ACERCA DO PRIMEIRO MANDAMENTO

一，キリシタンになりてより神（かみ）・ほとけ（仏）を拝（をが）みたりや否（いな）やと糺（ただ）し，拝（をが）みたるに（於）をひては，幾度（いくど）と其数（そのかず）をも申（まう）すべし。余*の条々（でうでう）にも，如此（このごとく）なるべし。

1. Christãoni narite yori Cami, Fotokeuo vogami tariya inayato tadaxi, vogami taruni voiteua, icudoto sono cazu uomo mŏsu bexi. Yono giô giô nimo, cono gotocu narubexi.

一，キリシタンになってから神・仏を拝んだことがあるかどうかを糺し，拝んだというなら，幾度そうしたか，その数を申させるように。以下の条々に関しても同じ要領で糺すべし。

1. Deverás perguntar aos crentes se têm adorado ou não Camis e Fotoques, e, caso afirmativo, deverás fazê-los dizer a sua frequência. Quanto aos restantes artigos, deverás perguntar-lhes da mesma maneira.

* 松岡洸司は「者」と読むが，意味的には「余」と読まなければ通じないようである。仮に「余」と考えてポルトガル語訳しておく。

SEGUNDA PERGUNTA ACERCA DO PRIMEIRO MANDAMENTO

二，神（かみ）・ほとけ（仏）のばち（罰）をを（怖）それたる事（こと）ありや。又人間（またにんげん）にばち（罰）・りしゃう（利生）をあたゆる（与）事（こと）叶（かな）ふべきと思（おも）ひたるや。

2. Cami, fotokeno bachi[11]uo vosoretaru coto ariya? Mata ninghenni bachi,

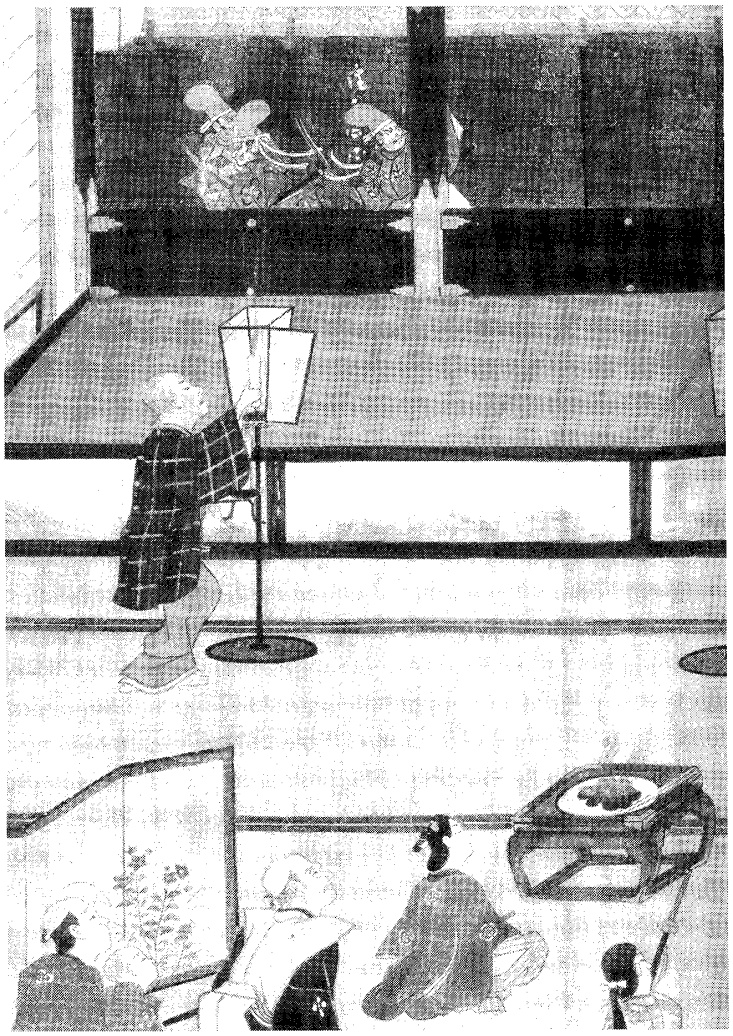
---

[11] Bachi [罰]. *Castigo de culpas.* ¶ Bachiuo cŏmuru [罰を被る]. *Ser castigado por suas culpas.* ¶ Bachiga ataru [罰が当たる]. *Receber castigo, ou pago dalgũa culpa.* ¶ Voyano bachiuo caburu [親の罰を被る]. *Receber o pago, ou castigo de Deos pellas desobediencias feitas ao pai, ou mãy* (*Vocabulario da Lingoa de Iapam com a declaração em Portugues, feito por alguns padres, e irmãos da Companhia de Iesu*, Nangasaqui, Collegio de Iapam da Companhia de Iesus, 1603; *Supplemento deste Vocabulario impresso no mesmo Collegio da Cõpanhia de Iesu*, 1604, f.18v).

rixŏ[12]uo atayuru coto canŏ bekito vomoi taruya?

二，神・仏の罰を恐れたことがあるか。また神・仏が人間に罰やら利生やらを与えるということが本当にありうると思うたことがあるか。

2. Temeste o castigo dos Camis e Fotoques? E pensaste que esses poderiam dar o castigo ou a felicidade aos homens?



武家屋敷での人形浄瑠璃の上演

英一蝶筆『四季日待図巻』(東京，出光美術館蔵)。日待は中世以来行なわれてきた神仏習合の祭事。元来，身を清め夜通し精進して日の出を待ち，朝日を拝むものであったが，江戸時代には祭事にかこつけ，夜通しさまざまな遊びを楽しむ行事となってしまった。正月・五月・九月の吉日を選んで行なわれたらしい。山本博文監修『ビジュアル NIPPON　江戸時代』(小学館，2006 年)より

[12] Rixŏ [利生]. *Premio, fauor, proueito, &c. dos Camis, & Fotoques.* ¶ Gorixŏni azzucaru [御利生に与る]. *Receber a graça, ou fauor dos Camis, ou Fotoques* (*Vocabulario*, f.211v).

TERCEIRA PERGUNTA ACERCA DO PRIMEIRO MANDAMENTO

三，ゼンチョのはう(法)に任(まか)せ，月待(つきまち)・日待(ひまち)をし，或(あるい)は祈禱(きたう)の為(ため)に，みこ(巫女)・おんやうじ(陰陽師)・やまぶし(山伏)などを呼(よ)びたる事(こと)ありや。

3. Gentiono fõni macaxe, tçukimachi[13] fimachi[14]uo xi, aruiua kitõno tameni, mico[15] vonyõji[16] yamabuxi nadouo yobitaru coto ariya?

三，ゼンチョのやり方に従って，月待・日待をしたり，あるいは祈禱のために神子・陰陽師・山伏などを呼んだりしたことがあるか。

3. Praticaste «Tçukimachi» ou «Fimachi», te encomendando às leis dos gentios, ou convocaste «Mico», «Vonyõji», «Yamabuxi», etc. de maneira a que lhes pedisses para fazerem preces?

病人のもとに呼ばれた巫女と山伏

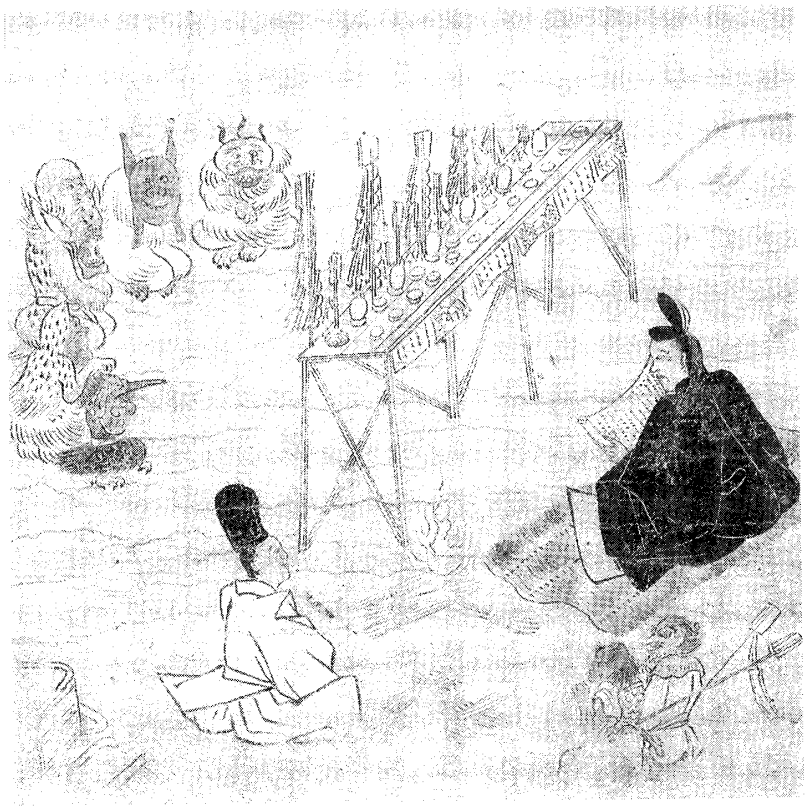
『春日権現験記絵』模本(東京国立博物館館蔵)。小松茂美編『続日本の絵巻 13 春日権現験記絵 上』(中央公論社，1991 年)より

[13] Tçuqimachi [月待]. *O esperar polla lũa quando sae que he hũa ceremonia dos gentios. Vt*, Tçuqimachiuo suru [月待をする] (*Vocabulario*, f.249).

[14] Fimachi [日待]. *O esperar o sol por ceremonia* (*Vocabulario*, f.90v).

[15] Mico [神子・巫女]. *Feiticeira, ou pessoa que serue ao Cami* (*Vocabulario*, f.158v).

[16] Vonyõji [陰陽師]. Vranaiuo suru mono, l, facaxe [占いをする者，または，博士]. *Feiticeiro, ou adiuinho* (*Vocabulario*, f.282).



祭文を読む陰陽師安倍晴明

『不動利益縁起』(東京国立博物館蔵)。「病気なおし」の場面。祭壇の向こう側に並ぶのが疫病神，手前のふたりの鬼は式神。国立歴史民俗博物館編『異界万華鏡——あの世・妖怪・占い 図録』(2001 年)より

QUARTA PERGUNTA ACERCA DO PRIMEIRO MANDAMENTO

四，たとひ心中にはキリシタンを捨てずとも，或は人よりキリシタンなりや否やと問はれたらん時，言葉を以て陳じ，或はキリシタンにあらずと顕さん為にゼンチョの数珠・守りなどを掛け，其外ゼンチョの行ひをなしたりや否や。此等の儀は真実よりせざれば，ヒイデスを失はする儀にはあらざれども，科なれば，コンヒサンに申すべし。

4. Tatoi xinjŭ niua Christianuo sutezu tomo, aruiua fito yori Christian nariya inayato touare taran toki, cotobauo motte chinji[17], aruiua Christianni arazuto arauasan tameni gentiono juzu[18]

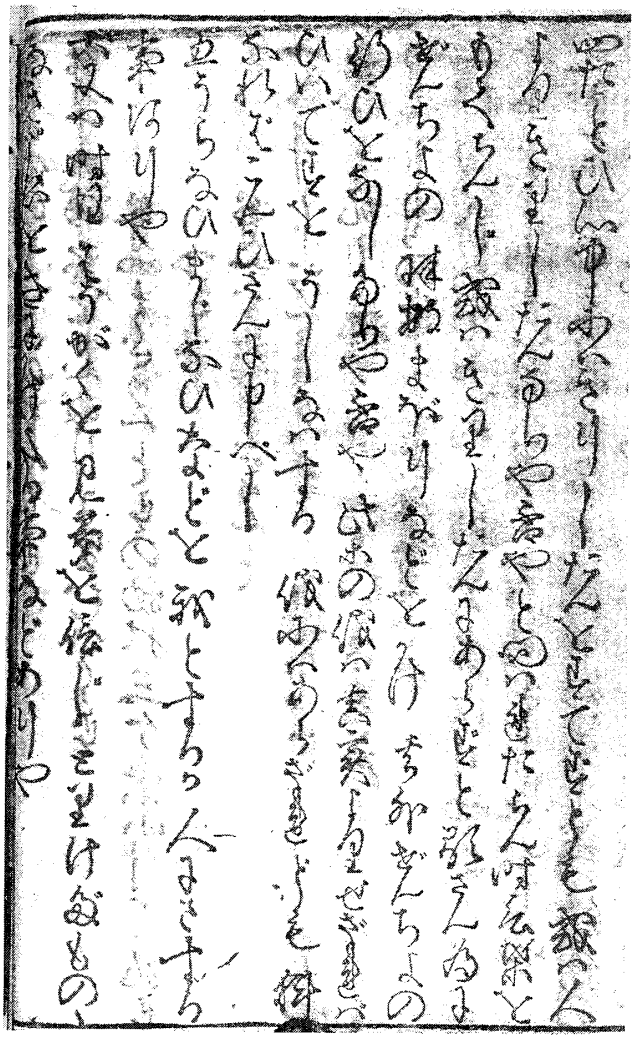
---

[17] Chinji [陳じ], Chinzuru [陳ずる], Chinjita [陳じた]. *Negar* (*Vocabulario*, f.48).

[18] Iuzu [数珠]. *Contas dos gentios*. ¶ Iuzuuo tçumaguru, l, curu [数珠を爪繰る，または，(数珠を)繰る]. *Correr as contas pollos dedos*. ¶ Iuzuuo suru, l, momu [数珠を擦る，または，(数珠を)揉む]. *Esfregar as contas entre as mãos adorando* (*Vocabulario*, f.147).

mabori[19] nadouo cake, sono foca gentiono voconaiuo naxi tariya inaya? Corerano ghiua xinjit yori xezareba, Fidesuo vxinauasuru ghiniua arazaredomo, toga nareba, confissãoni mŏsu bexi.

四，たとえ心中でキリシタンを捨てておらずとも，あるいは他人からキリシタンなりや否やと尋ねられたとき，言葉でもってそれを否定したり，あるいは，キリシタンにあらずと装うため，ゼンチョの数珠・守り札などを掛け，その他ゼンチョのように振舞ったりしたか，否か。如上の行ないは心底からのものでなければ，ヒイデス〔信心・信仰〕を失う拠り所とはならぬけれど，それでも科ではあるから，コンヒサンとして申し顕わすように。



『サルヴァトル・ムンヂ』「第一ばんのまだめんと」
四から六まで

[19] Mabori [まぼり]. *Nomina, ou relicario que se traz ao pescoço.* ¶ *Item, Aliquando, Guarda, ou proteição* (*Vocabulario*, f.147v).

4. Quando foste interrogado se eras cristão ou não, negaste a tua fé por palavras, ou efectuaste alguns actos de índole gentia tais como o de pendurar as contas e amuletos dos gentios, de maneira a que não fosses revelado como cristão? Tais actos, caso não praticados do fundo do coração, não constituem o fundamento de fazer com que percas a tua fé, mas, mesmo assim, por constituirem o pecado, deves confessá-los.

QUINTA PERGUNTA ACERCA DO PRIMEIRO MANDAMENTO

五，うらなひ（占）・まじなひ（呪）などを我（われ）とするか，人（ひと）にさする事（こと）ありや。

5. Vranai[20], majinai[21] nadouo vareto suruca, fitoni sasuru coto ariya?

五，占い・呪いなどを自分でしたか，あるいは人にさせたことがあるか。

5. Tu próprio praticaste advinhações, superstições, etc, ou fizeste com que outra pessoa as levasse a cabo?

SEXTA PERGUNTA ACERCA DO PRIMEIRO MANDAMENTO

六，又（また）は，時日（じじツ）・はうがく（方角）を見（み），夢（ゆめ）を信（しん）じ，とり（鳥）・けだもの（獣）のなきごゑ（声）をき（気）にかけ（懸）たる事（こと）などありや。

6. Mataua, jijit[22], fõgacu[23]uo mi, yumeuo xinji, tori, kedamonono nakigoye[24]uo kini caketaru coto nado ariya?

六，または，時日・方角に関する縁起を担ぎ，夢に見たことを信じ，鳥・獣の鳴き声を気に掛け

---

[20] Vranai [占ひ]. *Adiuinhar lançando sortes, &c* (*Vocabulario*, f.288). Cf. Vranai [占ひ], Vranŏ [占ふ], Vranŏta [占うた]. *Adiuinhar lançando sortes, & fazendo outras cerimonias* (*Vocabulario*, f.288).

[21] Majinai [呪ひ]. *Deprecaçoens, & ceremonias gentilicas, ou feitiçarias* (*Vocabulario*, f.150).

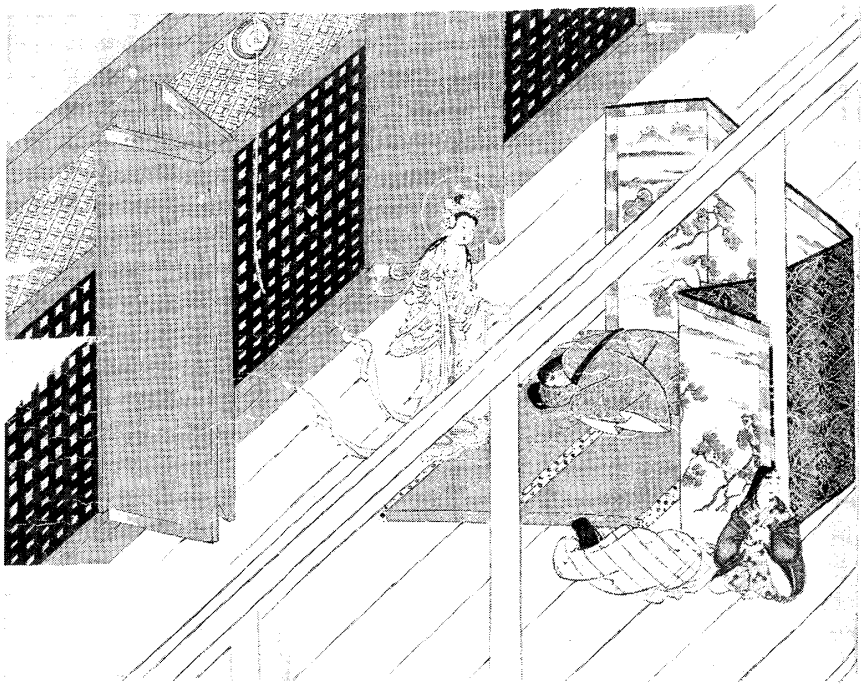
[22] Iijit [時日]. Toqi, fi [時，日]. *Hora, & dia. Vt*, Iijituo vtçusazu coreuo xeyo [時日を移さずこれをせよ]. *Fazei isto sem interpolação, & sem cessar* (*Vocabulario*, f.142).

[23] Fõgacu [方角]. *Parte, ou banda.* ¶ Fitono yucu fõgacuuo xiranu [人の行く方角を知らぬ]. *Não saber a parte pera onde vai alguem* (*Vocabulario*, f.100).

[24] Naqigoye [泣き声]. *Voz chorosa* (*Vocabulario*, f.177v). Cf. Naqi [泣き・鳴き・啼き], Naqu [泣く・鳴く・啼く], Naita [泣いた・鳴いた・啼いた]. *Chorar.* ¶ *Item, Cantar dos passaros* (*Vocabulario*, f.177v).

たことなどがあるか。

6. Ou creste em agoiros relativos às horas, aos dias e às direcções, acreditaste no que sonhaste, e te preocupaste com a voz dos pássaros e dos animais?



聖所での夢

『石山寺縁起』(石山寺蔵)。石山寺の金堂に参籠した式部少輔藤原国能の妻。夢中に観世音菩薩が出現して，彼女に如意宝珠の玉を授ける。小松茂美編『日本の絵巻 16 石山寺縁起』(中央公論社，1988 年)より

SÉTIMA PERGUNTA ACERCA DO PRIMEIRO MANDAMENTO

七，ヒイデスの条々(でうでう)に信(しん)ぜざる事(こと)ありや。

7. Fidesno giô giô ni xinjezaru coto ariya?

七，信仰箇条のうちに信を置かなかったものがあるか。

7. Desconfiaste em algum de quaisquer artigos da Fé?

OITAVA PERGUNTA ACERCA DO PRIMEIRO MANDAMENTO

八，キリシタンの教(をし)へは真実(しんじツ)なりや否(いな)や，又其教(またその)への内(うち)に何(いづ)れの題目(だいもく)にてもあれ，疑(うたが)はしく思(おも)ひたる事(こと)ありや。

8. Christãono voxiyeua xinjit nariya inaya, mata sono voxiyeno vchi ni idzureno daimocu nite

mo are, vtagauaxicu[25] vomoitaru coto ariya.

八，キリシタンの教えが真実であるかどうか，あるいはまた，その教えの中のいずれの題目であれ，疑わしいと思うたことがあるか。

8. Duvidaste que a doutrina cristã fosse verdadeira ou não, e pensaste que existia alguma coisa duvidosa relativamente a qualquer parte da sua doutrina?

NONA PERGUNTA ACERCA DO PRIMEIRO MANDAMENTO

九，ならふ(習)事かな(叶)ひながらオラショをならはず(習)，又知(しり)ながら申(まう)さざる事(こと)あらば，是(これ)をもコンヒサンに申(まうす)べし。又(また)しらざるに(於)をひてはならひ(習)，知(しり)たるに(於)をひては，今(いま)より後申(のちまうす)べし。

9. Narŏ coto canai nagara oraciouo narauazu, mata xiri nagara mosazaru coto araba, core uomo confissãoni mosu bexi. Mata xirazaruni voiteua narai, xiritaruni voiteua, ima yori nochi mŏsu bexi.

九，習うことができたにもかかわらずオラショを習わなかったり，それを知っていながら申さなかったりということがもしあれば，それをコンヒサンで述べるべし。また，知らないのであれば，この際に習い，知った以上は，今後は申すべし。

9. Se não aprendeste a oração apesar de ser possível fazê-lo, ou se não a disseste apesar de saberes dizê-la, deves manifestar isso por ocasião da confissão. Se ainda não sabes dizer a oração, deves aprendê-la, e uma vez que a tiveres aprendido, deves dizê-la a partir de agora.

DÉCIMA PERGUNTA ACERCA DO PRIMEIRO MANDAMENTO

十，身上(しんしやう)に，悪事(あくじ)・さいなん(災難)出来(しゅったい)し，或(あるい)は心(こころ)にまかせざる事(こと)ある時(とき)，デウスを恨(うら)み奉(たてまつ)り，或(あるい)は万事(ばんじ)を治(をさ)めはからひ(計)給(たま)ふ事(こと)なきかと疑(うたが)ひたりや。

10. Xinxŏ[26]ni, acuji[27], sainan xuttai[28]xi, aruiua cocoroni macaxezaru coto aru toki, Deusuo

---

[25] Vtagauaxij [疑はしい]. *Cousa duuidosa* (*Vocabulario*, f.289v). Cf. Vtagauaxisa [疑はしさ]. Vtagauaxŭ [疑はしう] (*Vocabulario*, f.289v).

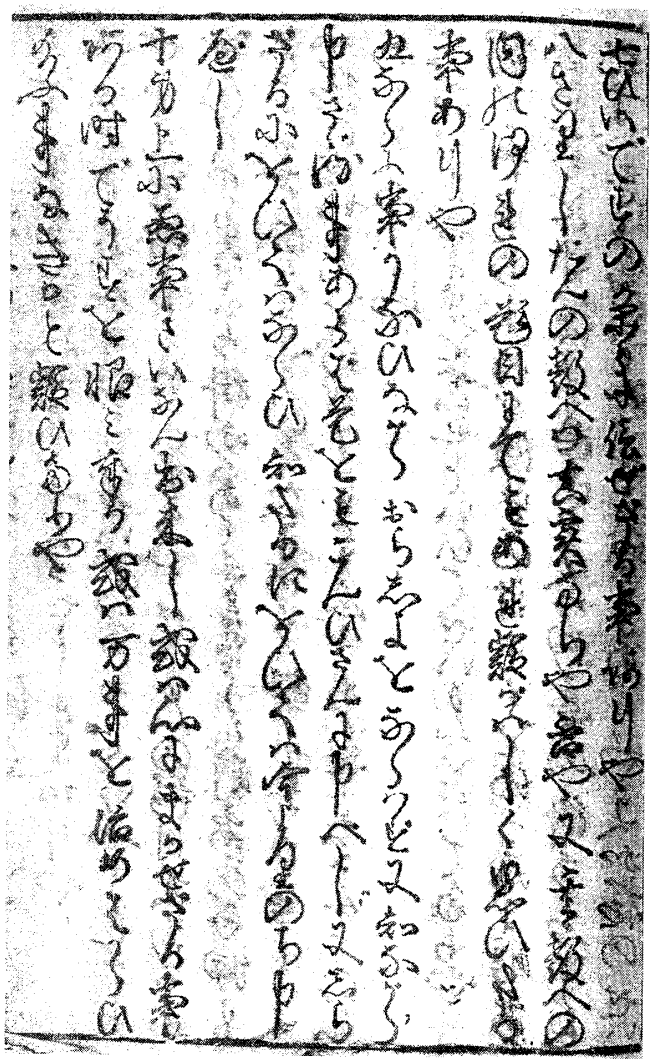
[26] Xinxŏ [身上]. Mino vye [身の上]. *Pessoa, ou estado da pessoa* (*Vocabulario*, f.304v).

[27] Acuji [悪事]. Axij coto [悪しい事]. *Obra ruim, ou maldade.* ¶ *Item, Cousa danosa, & preiudicial. Males,*

vrami tatematçuri, aruiua banjiuo vosame facarai tamŏ coto nakica to vtagai tariya?

十，身の上に悪事や災難が出来したとき，あるいは思うようにゆかぬ物事があるとき，デウスを恨み奉ったり，デウスが万事を治め計らい給うなど，あり得ぬのではないか，と疑ったりしたことがあるか。

10. Quando te sucedeu alguma má fortuna ou desastre, ou te aconteceu algo que não te agradava, tiveste queixas e queixumes contra Deus ou duvidaste que Ele não pudesse administrar nem providenciar tudo?



『サルヴァトル・ムンヂ』「第一ばんのまだめんと」
七から十まで

& *trabalhos* (*Vocabulario*, f.3).

[28] Xuttai [出来]. Ide qitaru [出で来る]. *O vir, ou acontecer, ou fazerse algũa cousa* (*Vocabulario*, f.315).